

滋賀で人と社会と文化芸術をつなぐプロジェクト“SANPOh”
令和4年度第1回焚き火ミーティング「芸術活動の“場”を考える」

日時：令和4年7月25日（月）19:00-21:00

場所：オンライン

参加者：9名

「芸術準備室ハイセン」の紹介 大津市で「芸術準備室ハイセン」を管理運営する神谷俊貴氏

○「芸術準備室ハイセン」立ち上げの経緯

静岡出身の神谷さんは、静岡県内の県立劇団 SPAC で経験を積んだ後、フリーランスの舞台スタッフとして活動する中で、芸術活動に携わる若手の人が本格的な作品づくりを行う場所を持たずに苦勞していることがわかったそうです。

公民館等の公共施設は塗料を使ったり、大きな音が出る作業に制約があり、また、公的機関等がアーティスト支援としてスタジオを提供する事業では、活動実績が重視されることが多く、若手の人が活用しづらい現状にあります。さらに、資金確保の面から、アーティストや芸術団体が自力で場所を持つことも難しい状況です。

誰もが芸術活動に参加できる社会でありたいと考えた時、「手軽に使える創作スペースをもっと充実していく必要があるのでは」と考えるようになりました。そこで、大津市内の元保養所の物件を借り、スタジオやアトリエを備え、宿泊も可能な日常と切り離して創作環境に打ち込める「芸術準備室ハイセン」を立ち上げられました。現在、その運営には神谷さんのほか数名のメンバーが関わっておられます。

○課題

開設当初、近隣の住民からハイセンの活動を理解してもらえないのではと懸念していましたが、丁寧に挨拶に回り少しずつ理解してもらい、またハイセンの廃材を使い自治会のごみの回収ボックスを作るなどのきっかけで、地域のメンバーとして信用してもらえるようになったそうです。

現在の課題は、施設の維持費用の確保や施設の周知に加え、「誰でも気軽に使える」の「『誰でも』とは、いったい誰のことなのか」を改めて考えているそうです。

また、「面識のないアーティストが複数人滞在する際のトラブル」や「ルールを守ってもらえない利用者にどう対応するか」などに苦慮されています。海外のアーティストに、不慣れな外国語で対応することでトラブルが生じるリスクを考えると、現時点では利用者を日本語でコミュニケーションできる方に限定せざるを得ないと考えておられるようです。

○将来の夢

活動場所に困った人たちがハイセンを利用して活動を安定させ、やがて「卒業」し、次に困っている人たちがハイセンを利用するという世代交代がされていくことと、この取組を良いと思った人が「第2第3のハイセン」を作り広げて行って欲しいと語られました。

○参加者同士の意見交換

Q1（将来、自分の劇場を作りたいので、）仲間をどうやって広げていったのか。（文化団体職員）

- A 1 大好きな演劇の仕事を共にする中で築いてきた人のつながりが大切です。友達100人がやっぱり良いです。(神谷氏)
- Q 2 さまざまな人に主体的に企画運営に関わってもらチームづくりはどうすればよいのか。(外国人学校の支援団体職員)
- A 2 協力してくれるメンバーの得意分野について話を持ち掛け、相談をしながら巻き込んでいくようなこともあります。(神谷氏)
市民が集まるショッピングセンターや地域のイベントに積極的に関わることで、団体の活動を広げることができます。(NPO法人職員)
- Q 3 障害年金で生活しているため、コンサートに行きたいが交通費の捻出が難しいと言われ、胸が痛んだ。どうすればよいのか。(演奏家)
- A 3 年金の使い方について、ケアマネージャーに相談してみてもどうか。(元社会福祉従事者)

○参加者の感想

- ・「県内外で文化芸術と共生社会について自分自身で考え、行動している方の実践をお聞きすることで大変刺激を受けた。」
- ・「知らなかったことを知れた。活動する分野は違うが重なる部分があり、情報交換できることがあると分かった。」